見本

実践を創造する

保育原理

第2版

みらい

見本

ま　え　が　き

保育の仕事は、歴史の蓄積であり、現代社会の課題対応であり、未来への扉です。「保育原理」は、保育者養成の最初に学ぶ科目で、他の科目群の基礎・基本に位置づく科目です。この科目の学修内容には、いつの時代にも変わらない不易のものと、社会の状況によって変化する流行のものがありますが、社会の発展とともに学ぶ内容は増えてきているのが現状です。

戦後70数年を経た今、わが国の保育・子育てを取り巻く社会情勢は大きく変わりつつあります。これまでに経験したことのない「超少子・超高齢化」に直面し、働く女性が増えていることから、保育所や幼稚園等に対する社会からの期待と要求も大きくなっています。保育を学ぶ学生の皆さんが子どもへの興味・関心とともに、社会からの期待や要望を感じながら、保育の勉強をしてほしいと思います。

2015（平成27）年４月から「子ども・子育て支援新制度」が施行され、子育てや保育をめぐる情勢が変わりつつあります。これからの時代の保育を創造していくためには、社会的、文化的、歴史的な視点をもちながら保育の原理を身につけることが大事だと考えられます。本書は、次のようなことを特徴として作成しました。

（１）　2017（平成29）年の保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の告示を受けて、保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園における保育の原理や考え方をしっかり学べるような章構成としました。

（２）　大学での授業回数に合わせて14章としました。各章のすべての内容が１回の授業で講義・説明できなくても、別の科目で保育のことを勉強するとき、あるいは、保育者になったときに、再度活用できるような内容にしました。

（３）　保育原理は講義科目ですが、初めて「保育原理」を学ぶ人たちが、「教えてもらう」学習ではなく、自分から興味・関心をもって読めるように、各章のとびらに簡単な問いかけを設定し、アクティブ・ラーニングができるように配慮しました。みずからの意見をもって授業参加をしてほしいという考えからです。

本書が、保育を学ぶ学生のために、そして、保育現場におられる方々のお役に立つことを願うと同時に、研修講座等での参考となれば幸いです。

この「実践を創造する」シリーズでは、すでに『保育内容総論』『幼児教育の方法』を刊行していますので併せて参考にしてくださることを願います。

2017年12月

編者　豊　田　和　子

見本

もくじ

まえがき

第1章　保育とはなんだろう ……11

1 子育てと保育 ……12

1．人間の子育ての特徴 ―チンパンジーとの比較から―　12
2．子育てという営み　13
3．「育児」と「保育」 14

2 保育の定義と理念 ……14

1．「保育」の定義 ―保育の辞典等から―　14
2．幼稚園も保育所も ―「保育」の理念―　15

3 新しい時代の保育と幼児教育 ……17

1．国の基準　17
2．新しい保育・幼児教育の方向　18

4「子どもの権利」と「最善の利益」の保障 ……20

1．わが国の法的根拠　20
2．児童の権利に関する条約（通称：子どもの権利条約）と保育　22

第2章　現代社会と子どもの育ち ……25

1 子どもを取り巻く現代社会 ……26

1．少子化と核家族化　26
2．母親の就労の変化　28
3．子どもとかかわる機会が少ない親たち　30

2 子どもが育つ場としての家庭・地域社会・保育施設の意義 ……31

1．家庭の意義　31
2．地域社会の意義　31
3．保育施設の意義　32

3 子どもの育ちと遊びの変容 ……33

1．遊びの変容　33
2．子どもの遊びの実態　34
3．子どもの自然体験　34

4 子どもの育ちと現代社会の課題 ……36

見本

第３章　保育が行われる場を知ろう ……38

1 日本の保育制度の特徴 ……39

2 保育を担う施設① ―保育所― ……40

1．児童福祉施設としての保育所　40
2．保育所の社会的責任と最低基準　41
3．保育所保育指針　42
4．保育所の設置主体　42
5．保育所保育に携わる人々　43

3 保育を担う施設② ―幼稚園― ……44

1．“学校”としての幼稚園の果たす役割　44
2．入所対象児と教育時間　45
3．幼稚園の設置主体と設置基準　45
4．幼稚園教育要領と教師の役割　46
5．幼稚園数の推移　46

4 保育を担う施設③ ―認定こども園― ……47

1．認定こども園が創設された背景　47
2．認定こども園の４つのタイプ　48
3．幼保連携型認定こども園の認可基準　49

5 子ども・子育て支援新制度の概要を知ろう ……53

第４章　保育者に求められるもの ―資質と専門性― ……56

1 保育者になるための資格・免許状 ……57

1．保育士　58
2．幼稚園教諭　58
3．保育教諭　59

2 保育者の実態 ……59

1．保育者の離職問題　60
2．保育者確保に向けて　60

3 保育者に求められる資質と専門性 ……62

1．専門職としての保育者　62
2．保育者の資質　64
3．倉橋惣三に学ぶ保育者の資質　64
4．保育者の専門性　65
5．保育者倫理と罰則規定　68

4 保育者の成長 ……68

見本

第５章　世界の保育の歴史に学ぼう
―諸外国の保育思想―　……72

1 集団保育施設が誕生した時代背景　……73

2 オーベルラン（Oberlin,J.F. 1740－1826）
―世界最初の保育施設「幼児保護所（編物学校）」―　……75

1．農民の生活向上に尽力した牧師・オーベルラン　75
2．幼児の保護と教育のための「編物学校」創設　75
3．保育の内容と方法　76

3 オーエン（Owen,R. 1771－1858）
―労働者の子どものために創設された「幼児学校」―　……76

1．工場経営者・オーエン　76
2．工場内保育施設「幼児学校」の創設　77
3．「幼児学校」の保育の内容と方法　77

4 フレーベル(Fröbel,F.A. 1782－1852)
―世界で最初の「幼稚園（キンダーガルテン）」―　……78

1．子どもと共に・子どものために生きたフレーベル　78
2．内的生命の表現である子どもの自己活動　79
3．遊びを中心とする保育　80
4．子どもとのかかわりを通して大人も変わる　81

5 モンテッソーリ（Montessori,M. 1870－1952）
―自由と環境構成を重視した保育施設「子どもの家」―　……82

1．障害児の治療・教育に取り組む医師・モンテッソーリ　82
2．「子どもの家」（Casa dei Bambini）の創設　82
3．モンテッソーリの子ども観　82
4．保育の内容と方法　83
5．環境を通しての教育　84

第６章　日本の保育の歩み　……87

1 幼稚園と託児所の誕生　……88

1．幼稚園の誕生　88
2．託児所の誕生　90

2 幼稚園と託児所の歩み　……91

1．幼稚園の歩み　91
2．託児所の歩み　92

3 保育の歩みを支えた人びと　……93

見本

1．倉橋惣三（1882－1955）―児童中心主義の保育―　93
2．城戸幡太郎（1893－1985）―社会中心主義の保育―　94

4 戦後の幼稚園と保育所の歩み ……95
1．戦後の日本と保育をめぐる状況　95
2．学校としての幼稚園と児童福祉施設としての保育所の誕生　95
3．幼稚園と保育所の関係の変遷　96

第7章　保育に求められる子ども観・発達観 …… 100

1 時代とともに変わる子ども観と発達観 …… 101

2 子どもへのまなざしと子ども観 …… 101
1．子どもの発見と人間の内なる「自然」―ロックとルソーの革新―　101
2．内なる「自然」に働きかける営み ―ペスタロッチの実践―　102
3．環境構成の芽生え ―フレーベルの植物のたとえ―　103

3 子どもが育つ環境と発達観 …… 104
1．発達とは　104
2．人間としての発達の独自性　104
3．野生児たち　105
4．子どもの発達をとらえる枠組み　105

4 保育における子ども理解 ―子どもへの「まなざし」― …… 107
1．子ども理解からはじまる保育の営み　107
2．「まなざし」で向かい合う子ども理解　108

5 保育実践における子ども理解 …… 110
1．子どもを理解するための方法　110
2．子ども理解と保育内容（子どもの生活と遊びと学びの意義）　111

6 今日的課題としての特別支援の視点 …… 111
1．理想と現実　111
2．求められるインクルージョンの理解　112

第8章　保育の基本 …… 114

1 保育所保育指針に示される保育所保育の特性 …… 115

2 家庭との緊密な関係 …… 116

3 発達過程に応じた保育 …… 116

4 環境を通して行う保育 …… 118

5 養護と教育の一体 …… 120

見本

1．養護と教育の意味　120
2．養護と教育の一体とは　121
3．遊びを通しての総合的な指導　123

第９章　保育の目標と内容 …… 126

1 保育の目標とは …… 127

1．保育の目標のとらえ方　127
2．具体的な保育の目標　128
3．保護者への支援　129

2 保育の内容について …… 130

1．保育内容の構造　130
2．養護に関わるねらいと内容　131
3．教育に関わるねらいと内容　131

3 保育内容の総合的展開 …… 139

第10章　保育の方法と進め方 …… 142

1 園生活の流れを理解する …… 143

1．保育所の一日の流れ　143
2．幼稚園の一日の流れ　146
3．認定こども園の一日の流れ　146

2 保育方法の基礎的理解 …… 147

1．乳児の保育　147
2．幼児の保育　149

3 さまざまな保育形態について …… 150

1．クラスのみんなで楽しむ活動 ― 一斉保育―　150
2．グループで楽しむ活動 ―グループ保育―　151
3．個々の子どもが自由に楽しむ活動 ―自由遊び保育―　151
4．異年齢交流を楽しむ活動 ―異年齢保育―　152

4 保育環境の種類と理解 …… 152

1．物的環境　152
2．人的環境　153
3．自然や社会事象など　154
4．雰囲気という環境　154

見本

第11章　保育の計画と保育の質の向上 …… 157

1 なぜ保育に計画があるのか …… 158

2 全体的な計画と指導計画 …… 159

1．全体的な計画　159
2．長期の指導計画（年・期・月）　159
3．短期の指導計画（週・日）　159
4．発達や個人差を考慮した計画作成　160

3 保育における評価 …… 161

1．評価の働きとは　161
2．保育におけるさまざまな評価　161
3．保育実践を支える仕組み　162

4 記録と振り返り …… 163

1．保育の記録　163
2．記録と振り返りの意義　163
3．少し時間をおいて振り返る　164
4．評価を行うことによって保育者も育つ　164

第12章　大切な子育て支援と地域連携 …… 166

1 子育て支援の意義と原則 …… 167

1．子育て支援を必要とする社会　167
2．子育て支援の意義　168
3．子育て支援の原則　168

2 保育所を利用する保護者に対する子育て支援の方法 …… 170

1．保護者との相互理解　170
2．保護者の状況に配慮した個別の支援　171
3．保護者に不適切な養育等が疑われる家庭への支援　171
4．保育所における保護者支援の実際　171

3 地域子育て支援における地域連携の意義 …… 172

1．地域に開かれた子育て支援　172
2．地域の関係機関等との連携　173

4 地域連携の方法 …… 174

1．母子保健関連機関との連携　174
2．療育機関・療育施設との連携　174
3．児童相談所や婦人相談所等との連携　174
4．主任児童委員など地域子育て支援の関係機関との連携　175
5．学校との連携　175
6．地域子育て支援における連携の実際　175

見本

第13章　海外の保育に目を向けてみよう …… 177

1 保育をめぐるOECD諸外国の動向 …… 178

1．保育の量的な拡充と質の問題　178

2．カリキュラムの２つのタイプ ―就学準備型と生活基盤型―　179

2 欧米諸国の保育実践 …… 180

1．「就学準備型」の保育　180

2．「生活基盤型」の保育　182

3 その他の特色ある保育実践 …… 184

1．シュタイナー幼稚園　184

2．森の幼稚園　186

第14章　保育をめぐるこれからの課題について …… 189

1 揺れ動く社会情勢のなかの保育の課題 …… 190

1．保育と社会のつながり　190

2．少子化問題に対する国の政策動向（1990年－今日まで）　190

2 子ども・子育て支援新制度の概要 …… 193

1．３種類の「施設型保育」と４種類の「給付型保育」の充実　193

2．認定こども園の改善　194

3．地域の実情に応じた子育て支援の広がり　195

3 保育の量的な整備と多様な保育サービスの提供という課題 …… 195

1．待機児童問題　195

2．多様化する保育ニーズへの対応　195

4 特別な配慮や支援を要する子どもの保育 …… 199

1．受け入れ状況　199

2．統合保育とインクルーシブ保育　199

5 保育の質と課題 …… 201

1．保育の質を高めるために　201

2．みんなが幸せに生きるために問い続けよう　201

索引　204

見本

第１章　保育とはなんだろう

● ウォーミングアップ ●

自由にイメージしてみよう

　あなたが保育者になったら、どのような保育をしてみたいですか？　思いつくままに書いてみよう。

見本

第１章の学びのポイント

- 「保育」という用語の意味を考えてみよう。
- 社会の変化と「保育」の役割について理解しよう。
- 子どもの最善の利益という観点から、「保育」の課題を考えてみよう。

1 子育てと保育

1 人間の子育ての特徴　―チンパンジーとの比較から―

保育を学ぶにあたり、まずは人間の子育てを大きな視点からとらえてみよう。「子育て」という営みは、いったい、いつごろから始まったのだろうか。

こうした疑問に対して、『人間とは何か チンパンジー研究から見えてきたこと』[1)]という本のなかで、松沢哲郎氏が興味深いことを教えてくれている。

そもそも地球上に生命が誕生したのが、今から約38億年前だといわれる。しかし、多くの生物は、産むだけで育てなかった。たとえばカエルのように卵を産むが、オタマジャクシを育てていない。ところが３億年ほど前に、恐竜や鳥類、哺乳類が出現することによって、親が子どもの世話をしたり、卵を温めるなどして、自分のエネルギーと時間を子どものために使って子育てをするようになった。その頃から子育てという営みが誕生したのだ。

30年間以上チンパンジー研究を続けている松沢氏は、チンパンジーの子育てから人間の子育ての特徴が見えてきたとして、次のような違いを指摘している。

チンパンジーも人間の子どもも、同じように、大人になるまでに脳の重さが約3.2倍になるといわれ、その間に多くのことを学んで成長するのであるが、その最初が、人間の場合は「あおむけに寝かされる」ところから始まることに着目して、人間の子育てのユニークさを説いているのである。

表１－１　チンパンジーと人間の子育ての特徴

チンパンジーの子育ての特徴	人間の子育ての特徴
①子どもが母親にしがみつき、親はずっと子どもを抱き続けている。	①生まれた時から、母親の身体から離れて、あおむけに寝かされている。
②子育ての期間が長く、一人（一匹）を大事に育ててから次の子どもを生む。	②比較的短い間隔で複数の子どもを生む。きょうだいの同時育児。
③基本的には、母親だけが子育てをし、父親やほかの仲間は関与しない。	③父親や祖父母や近所の人など、母親以外の仲間が子育てに関与する。

出典：松沢哲郎著『人間とは何か　―チンパンジーの研究から見えてきたこと―』岩波書店　2010年 pp.146-147ページを参考に筆者作成

見本

人間の赤ちゃんはあおむけに寝かされているから、母親だけでなく父親やきょうだいたちがのぞき込み、ほほえみかけ、手を握り、声をかけ、かかわろうとする。

人間の赤ちゃんは母親にしがみつくのではなく身体が離れているので、向き合いほほえむというコミュニケーションによって育まれる。これは、チンパンジーには見られない光景であり、人間の子育てが、そもそも、母親だけのものではなく、父親も関与し、多くの仲間が助け合って「みんなで子育て」をするという貴重な特徴を持っていることを、私たちに教えてくれている。

2　子育てという営み

私たち人間は、誕生してから少なくとも数年間は、親をはじめとする身近な大人からの世話や保護なしには生きていけない。産声をあげて以来、毎日毎日、授乳やおむつの取り換え、衣服の調節など細やかな世話をされ、愛情をかけられながら大きくなる。まだ言葉や歩行を十分に習得していない乳児期には、世話をする大人は子どもの表情や泣き声からその欲求や訴えを読み取り、愛情を込めてそれらの要求を満たしてやろうとする。世話を受ける子どもの側も、大人や周囲の人たちとの情動的な交流ができることを大いに喜ぶ。こうして、幼い子どもは一見、大人からの世話を受けるだけの存在であるかのように見えながら、その子の反応や表情、そして子どもの存在そのものが世話をする大人にも多くの喜びや希望を与えてくれるのである。子育ては、日常生活のなかで時間と場所を共有する大人と子どもとの双方の交流関係において成立する人間的な営みである。

子育ては一義的には、家庭で保護者の責任のもとに愛情に基づいて行われるものである。と同時に、子育ては次の世代への文化の継承や人間らしい生活や価値観の伝承などの機能を持つ社会文化的な営みでもある。子どもは一家庭の一員であるだけでなく、大人に成長していくまでに保護者以外の多くの身近な人たちによって支えられ、同世代の仲間との多様な交流を通して人間らしい行動や価値観を身につけ、やがて次の社会を担う人になるのである。この意味で、子育ては人類の社会的・歴史的な営みである。

見本

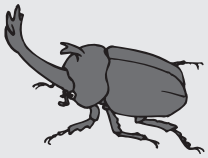
3 子どもの育ちと遊びの変容

1 遊びの変容

「幼児の生活＝遊び」といわれる。子どもは日常生活における遊びという活動を通して、その楽しさ、おもしろさを体全体で感じつつ、さまざまなことを学んでいく。しかし、高度経済成長と消費社会の到来により、子どもの遊びも大きく変化した。物質的に豊かになって、テレビ文化が普及した。その結果、子どもは自然から遠のき、おもちゃやゲームなどの遊びが増えた。地域での集団遊びはめっきり減った。遊びの質を保つための「三つの間」（遊び時間、遊び空間、遊び仲間）が縮小したのである。

河崎は「子どもの遊びの変化は、同時に大人と子どもの様々な様式（地域と家族の形態、衣食住をはじめとする家庭生活、教育や子育て、休息や娯楽など）全般にわたる変化とともに進行したものである」[1)]と述べている。さらに子どもの生活について「遊ぶこと以前に、子どもが成長の途上で蓄積していくはずの日常的体験のありように大きな変化が生じていて生活と遊びの中での『喜び』『楽しみ方』の構造的変化ともいうべき事態が生まれている」[1)]と指摘している。

事例２　「カブトムシは買ってくればいいんだよ」



Ｔくんは３歳のときにカブトムシのつがいをもらった。Ｔくんはこまめに世話をし、小学校３年生になるまで長らく飼育を続けた。その間、カブトムシの卵、幼虫はもちろんのこと蛹（さなぎ）が羽化（うか）するところも観察でき、生き物に興味を持つたいへん良い機会となった。

しかし、小学３年生のとき、カブトムシはついに卵を産むことなく死んでしまったのである。Ｔくんのお父さんは「これまで６年間もカブトムシを育ててきて、卵や幼虫など、いろいろ見たり、触れたりして勉強することができたのだから、もう飼育をやめよう」と言った。しかし、Ｔくんは「まだ続けたい」と主張した。お父さんが「それじゃ、カブトムシはどうするの？」と聞くと、Ｔくんは次のように言ったのである。「カブトムシは、ホームセンターで買ってくればいいんだよ」。

これはすでに20年以上も前の事例である。カブトムシは子どもたちにとって宝物だった。どんなところに生息しているのか、どうしたら採れるのかと、かつては子どもながらに試行錯誤を重ねて手に入れたものである。しかし、20年前にすでに、「金銭さえ支払えばいとも簡単に手に入る」という生活に慣れてしまって

見本

苦情や騒音など、問題が起きるとそのことばかりが注目を集めやすいが、もちろんそれは全体から見れば一部の話である。家庭と地域社会と保育施設という子どもの育つ３つの場が、人と人の「絆（きずな）」を形成し、豊かな保育を育んでいる園も全国にはたくさんある。良いモデルに学び、工夫を取り入れることで、未来を担う子どもたちの健やかな育ちを保障していきたい。

【引用文献】

１）河崎道夫「歴史的構成体としての子どもの遊びの変容」日本保育学会『保育学研究』第46巻 第１号　2008年　p.16

【参考文献】

岡本裕子・古賀真紀子『青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析』広島大学心理学研究　2004年

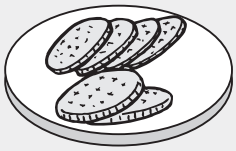
田中まさ子編『新時代の保育双書　保育原理　［第２版］』みらい　2010年

三宅茂夫編『新・保育原理　―すばらしき保育の世界へ―　［第２版］』みらい　2012年

関口はつ江編著『保育の基礎を培う　保育原理』萌文書林　2012年

コラム　ひとりっ子ときょうだい

20年も前のこと、筆者の妻の友人が２人の男の子を連れて遊びに来てくれました。筆者の子どもは男の子でひとりっ子、妻の友人の子どもも男の子で同年代の２人きょうだいでした。大皿にいっぱいのお菓子を出したとき、あることに気づきました。それはまさしく子どもの「生きる力」だったのです。



２人のきょうだいはお菓子が出された途端、自分が食べたいもの、そして食べたい量をまずは手元に確保しました。私のひとり息子はそれをあぜんとして傍観し、カラになった大皿を見て「僕のお菓子がない！」と叫んだのです。これは何を示唆しているのでしょうか。

良し悪しはさておき、２人のきょうだいは、これまでの日常生活の体験を通して、各々が考え、どうしたら自分自身が心地よく生活できるかを学んできたということなのです。こうしたことからも、保育・幼児教育が目指す「生きる力の基礎を培う」を達成するために、直接的体験がいかに重要であるのかを感じました。